

一語一言卷之二十三

唐飲春草 護持院隆光碑

四朝別史

朱文公小字 猿子眠

婦人の癡

古万三 妄用 天狗爪

吉祥寺跡の山菜

無恙 女兒翁

隨筆 仰の中拙書

米金ノ事 家中ノ禄ヲカリト

筆海道ノ事

寛永飢饉ノ事 臘月世中語ト云

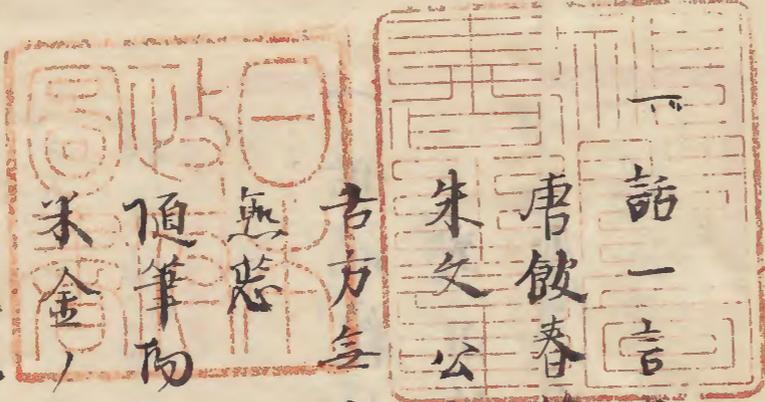
借ニ金ノ丁

明曆火事ノ事 安居院ノ五字七字

犬ヲ飼フ丁

松下源九頼朝ノ事 加藤九馬允ノ事

加藤肥後守丁



蒲生氏郷ノ事

蒲生源兵衛ノ事

赤銅作助ノ事

高野定光院ノ事

忍城主古河ノ事

心付忌ノ事

光秀ノ事

煙草ノ事

七種吳石

笠寺ノ事

明庵自叙ノ事

堀田殿ノ事

一世説雜話ト題セル本中

武田信玄ノ事

赤松円心ノ事

山崎宗鑑ノ事

たのこ誦讀ノ事

語一言卷之二十三

長崎唐館の浦客の部屋の戸の五月の紙

手紙の三文字の書りその字形の奇麗

五月の紙の包紙の

の紙の唐館の紙の長深の俵の

譯司彭城仁左衛門の石屋の請人の間

たのこ誦讀

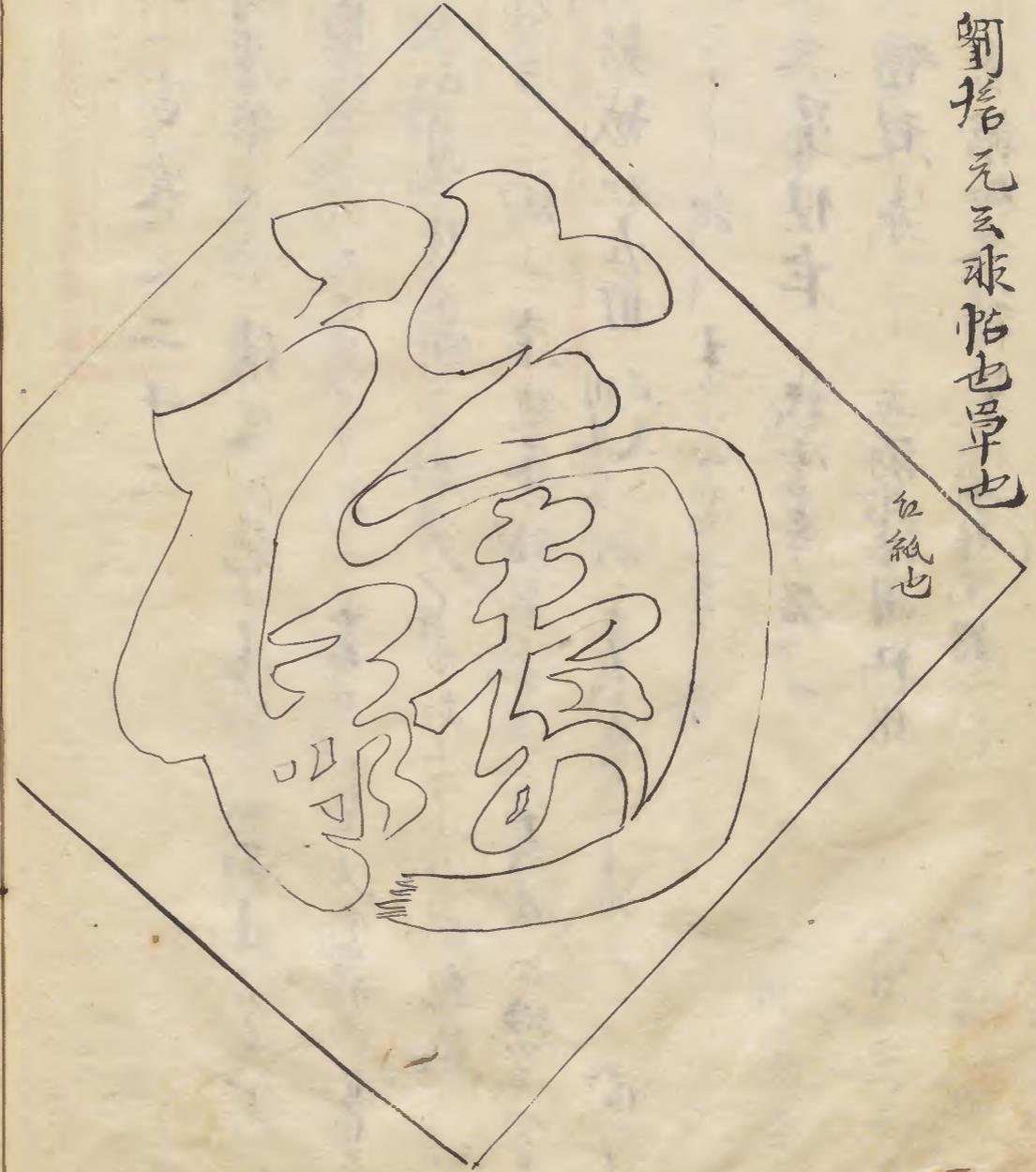
三星俱在 銭雲亭銘

福祿寿 孟海九潘用社銘

唐館加春禧草 劉培元銘

劉培元云張帖也草也

紅紙也



按明高琦文章一貫曰稠疊新話云文字有意同而
立語有工拙沈存中記穆修張景二人同造預方論
又次適有奔馬踐死一犬遂去坐各記其事以較工
拙穆曰馬逸有黃犬遇蹄而斃張曰有犬死奔馬之
下今較此二語法當為勝然存中但云適有奔馬踐
死一犬則又渾成矣又張鼎忠瑯琊代解編卷三十九
亦多記之一也異同一也今法一也西人の没一也不
在子海に淺雲亭ハ工一也孟清ハ拙一也昔ハ劉培元
少混一也 文化丙寅朔記

一 江戸洲崎辨天社北ノ僧祿司護持院隆光の碑あり

猿眠抱其膝也鳧鶴眠踵其膝也今俗小孩抱
之眠乃猿子眠と云

一 同書法婦人疾有不能者聖人之法者今富貴人家
居奧室之中處唯慢之因甚又以帛蒙半臂既不能
行宜免之非又不能彈切脉之巧四者有二缺云々
是今の系脈と云々乃其脈也

一 同書古方云妄用翻物周慎医有十全之功云古方
如聖惠千金外臺秘要所論原脉症及針灸法皆
不可廢然此方分劑与今大異不礙既其旨者謹勿
妄用有人以目疾用古方福之目遂突出又有婦人

因産病用外臺秘要産導方其後及以惡露候終
身不差曾有士人得脚弱病方昏羅列積藥必山而
病益甚余令悉屏去但用杉木為桶盛水濯足并令
排樟枳於兩腋間以脚翻繫定月餘而安健如初南
方多此疾不可不知頃因名医語必不妄故録于此
今の古方科と稱する醫者と云々此失り云々

一 能明石動イんレキ山林中ニ天狗ト云物アリ色青黒ニメ
長サ半寸許ニメ石ノ如ク先尖ニ後廣ク獸ノ爪ニ似テ
土入雷雨ノ後林中ニ往テ是ヲ拾フ瘡ヲ患ル者水中
ニ投ル其水ヲ飲トキハ愈ム不知何物也想フニ金石ノ類ヲ

人詭于神物トスルカ民生切密録ニ

一江戸内蔵水建部氏（建部氏）の巻海（海）の巻也（也）の巻也（也）

吉祥寺の法（法）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

板小東田二（二）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

時の大受（大受）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

江戸画図（画図）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

も之（も之）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

一近年米價後（後）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

と懸荒（懸荒）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

清堂舎（舎）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

之而逃（而逃）有貨充（有貨充）付（付）每过問（每过問）者（者）百姓（百姓）踊（踊）為（為）熟荒（熟荒）枕憶（枕憶）順（順）

右丙戌辛卯兩年（右丙戌辛卯兩年）米價騰貴（米價騰貴）每石價至四兩餘（每石價至四兩餘）兩民

反無流止者（反無流止者）古人云穀裁傷農信然（古人云穀裁傷農信然）薛宗伯所總有

豐逃行（豐逃行）慨辛其言之也（慨辛其言之也）

尊梅快書袖珍本（尊梅快書袖珍本）説鈴（説鈴）中（中）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

説鈴（説鈴）又國朝詩別裁（又國朝詩別裁）の作者二百余人（の作者二百余人）

の中（の中）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

春売（春売）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

一女兒顔色花様

海英（海英）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）の巻也（也）

程赤城の文書二冊

作者不知

一 随筆物三冊あり其の中

○或曰今ノ世ホトスリ切ノハヤルナシ金銀ノ不足ハイカ様ノ夏ト云ケレハ友人云今ノ世ホト金銀ノ沢山下ニアルナリ前代未聞之衣類居宅食物祝言ノ数々昔二百倍セリ諸事ニ心ヲ付テ見玉ハサテ元和頃越前福井ノ城下松本ト云所ニテ所入氏名至所へ寄合元服名ヲ改トテ其の中ニ金子所持ノ者有トテ何モ虎望ニテ拜見セシト云ケレハ金至巾着ヨリ八重ニ包ヲキタルヲホトシ

金一歩ヲ取出見セケレハ上下イタキ手渡ニスルトテトリ落ケルニヤ何方ニテ失ヒケレ氏知ラス失ヒタルト之直頃石葱ニ物ノ見ヘサルヲ戴失タルカト章句ニ云ケリ其トニ金子ト云物ヲ凡下ノ見ルナリヲタモナカリニ今ノ世ハ金食非入ニ金銀澤山ニ處持ヤリ又寛永ノ末迄ハ八木ノ直段北國ノ米止斗ノ表銀六匁ニ賣ニテ平モ覺ケル也其首午歳大飢饉ノ時天下ニ統飢死ノ方多ク是年ノ秋又ト連賀明ヨリ越前へ行ケル時小松ノ串野ト云所ヲ通ニ松原ノ内ニ石尾ノ如白ク見ヘケリ朝霧深シテ横成良見分カタニ依之馬形ニ尋ケレハアコッ午ノ

歳ノ大飢饉トキ飢死ノ者ノ首ニ繩ヲ付テ此所ニ在ニ
ヨリ捨テ其骸骨ニナリトツ申ケルサキカラ石川ノ水ノ夕夕
方如シ又馬形ヲカ親ニ語ケルハ御奉公人ホト信置ナクハ
此度ナリル其節トテモハ未ノ高直ヲ御覧之扱也
五斗ノ俵二十目ニ買ヒルハ叔未氏ノ命ノ只今迄ナラハ
申ハ不思義也トソ語ケレ然ラハ其以後明暦四年五
斗六斗日ノ直段ナレ氏五斗止目ノ時程飢死ノ者モハ
方リキサアハ金銀ハ下ニ多渡有ト見ヘスリ然故ニ
人ニ蒼者百ト知ヘシ

近年ハマリ狗畜中ニ家来ノ禄ヲカリ玉夏神代ハ

不知人王己未ノ跡夏之和漢ノ古キ日記ニモ見ヘ
ス是所ノスタリタル故之言葉ニ借用ト聞ヘケレ積テ
返ル字ハ所モラヒトマフ云ヘカリキ去レ氏積テ返ル又
家中御教ノ御家モアリト之知家来ハ一命ノ御用ニ
達ル者ナレハ俸禄敷實何ツ異義ニ及テアラニヤ
諸藝ヲ習始ル時初ヨリ人並ニ成タキト思フハカクシ
カレハカラス人並ト云ニモ品クアリ家ニタカフリタル悪
ケレ氏諸藝ヲ習始ノ時ハ天下ニ成ヘシト思テ取付
テモ漸シ人並ニモ成カヌル者也世語ニ富士山未ト扱
テ桃ノ實ホト叶トハ云ナラハセリ筆海通帝ニ

三國筆
海通記
ハシ

予ニ諾し、世人曰、愚ハ人ニ勝レテキコウ有テ能書也トホムル人多シ是愚ナル言諾ナリ習ハスコト何ソ人ニ勝ル、度アラレ凡千人ニ秀コト思フ、千人ノ切ヲ一人ニテ勤ムヘシ、万人ノ切モ是同シ我若キ時、天下ノ能書トナラコト志ケレ、其功不足ニメ知、少ナシ、傳ナルカ、十人身ノ妙ハ物ニ付ト云事是也、晋ノ王羲之ハ漢和ノ筆祖ナレ、是ナ、五十三歳ノ時、筆妙悟道トアリ、予ハ五十五歳ノ時、小泉氏カ屏風ヲ看コト時、少筆法ヲ心得ムリト諾ラレケリ、此人若キ時、予習ヲセシ、勤フ、度、教言有之、先一言ヲ云、ハ、冥ニ

予習ヲセシ、勤ニ予ノ中、熱シケレ、器物ニ氷ヲ入置、予ヲ差入、ヒヤシク、習ヒタリトナリ、餘ハ是ヲ以、察シ、而、寛永年中、午年、天下ニ統一統ノ飢饉ニ、六田ノ畔ノ草ヲアラヒ、木葉松竹ノ翠ヲ、板食セ、ココカ、ル、処ニ、近年、サ、ミ、豊年ナラ、子トモ、民ノ心、後、當、百姓、凡、下、ノ、宵、衣、類、店、宅、等、錯、構、ニ、ナリ、命ニ、替、タ、ル、金、銀ヲ、ム、サ、ト、老、ニ、ヨリ、大、難ヲ、以、無、常ヲ、示、玉、ヘリ、上、下、累、人、常ニ、沙汰セルハ、臘月、ト、重テ、今年ノ、程、世ノ、中、強リ、タル、ナ、エ、ト、イ、ヘリ、何、ソ、年、ニ、カ、豊、ナル、暮、ト、云、ト、ナ、キ、カ、ス、然、氏、歳、モ、明、シ、ハ、又、何、カ、ト、抄、等、是ヲ、忘、ル、ト

見エクリクタル世ノロクセニテ往クモ然ルヘシト畧
或曰世間ニ一向借シ金トシテ復ナカリセハ一軍の
暮ヲ考ヘ後モ多ハ有人カラス借金ヲ頼ニシトシ
奢百ト見一タリ乱世ニ借物ナケレバ亂タル者モ
若不惠ノ復出末スル正常ニ心直ナル者ハ互ニ合
ヘキ也然ラハ公事涉込モナク親属ノ中モ火切
明友モ捨ヘテラストイヘリ是モ一義アルナリト下正ニ
身持ヲ大切ニサス人ノ宝ヲアラコトシ奢ヲ極賞
ヲ歌ハス刹ヤ、モスレハ元利ナクナリ玉フ方モアリ是ハ
言葉ノ習タル下々ノ竊ト同一之家臣ノ毎道トシ

多ハ起ルモアリカ、ル非道ノ積ヌレハ家滅タル多シ
古語ニ釣ヲ盜者ハ節シ國ヲ竊者ハ免大権現宮
首駿刈ヘ入セラレ狐崎筋新罪ノ者アルヲ御尋ノ取
盗ノ者也ト申上ル其取イタハシヤ白紙ヲ以登陸盗ヲ
復ヲ知ラスカクハ成シト仰ラレト之是借物ナクナリ
ノ復ストツ

物之費ト云ニ品々アリ或時真^{コサキ}幸氏一行ケルニ折節
ナル大名ヨリ巾袖ナト音物ニ来リ使者由テ後弔ニ對是
見玉ハ大名一物去テ遣ケレハ如快ニ礼アリ各ニ書ニ書
程費ハ毎トタハフテサレ正心ニ費正心ニ

能書ナリト各カモテハヤスニヨリ此音物モ来ト笑ア
リ識ニカレ類多ク大医ノ下賜ハ薬ヲアタヘルモ費ニ似
タリサレト上キト洒汰ヤルハ下ヨリハマセハ之或医ノ多ク
ニ亦ニ薬代ニ心付ヘアラス偏ニ瘡治ニ心ヲ入治スル者
ヲユ又スヘト或大医ノ傳ニ下賜の者又ハ浪人ノ家内
出入ニ費ニ似タレトモ是モよく用ヲ辨スルヲ多ク
モ牢人ナリト所明曆四ノ歳江府回祿前代未聞之
昨数年合ヤヲ受ル者本郷天澤寺ノ前ニ居住シ
ケルヲ僕ヲ召連浅草ヨリカケ角ケルニモハヤニ三軒
トナリ迄火後来レリ序王長病ニヘトク書下人トモ

下谷へ退留守ノ可へ行見レハ諸道具衣類等ヲ
稽置ケリ予カ下人ニ先ツラ一モツセ天神ノ後ノ入
江ノ寺へ足ニマカセテ行ケル所ニ此寺ノ且那ト思ヒ乞
ニヤ門ヲセラキ是へト招ケリ少々老ハ思ケレト先ハ能
夏ニ思寺ノ後イ山キハ葛籠ヲ指ヲキ取テ返シケレハ
ヤ鄰ノ家ニ火付ケリカレト長持ナト取出処へ亭王カ
下人二人来ルヲ以テ三人ニテ道具アラコル運セケレハ
衣類ハ不残出シ空ノ地ノ風上へ雜具出サセ及ニ
火カレリケレハ幸キ命タスカリ彼寺へ一夜ヲ明シケリ
其日朝ノ食ニテ働ケレハ主従亂ケル処ニ寺ニテ火釜

二粥ヲ多クセイハレモハフルマイケルハ飢ヲ養ケリ十八十九
犬犬殊ニ雪フリ寒スル夏ハ夕ノ剪カハ之飢寒ハ此ニ
彼守ニカラレシ之世静ニナリ一礼申ケレハ其節ハ
且那斗ノ志ニモ疎奇ハ御入ノ方ハ誰ニテモ己一等
ノ志ノ十方且那ナレハ何カヘタテ有ヘキヤト申付
レケレハ殊勝ニコフ覺シ也飯其夜明ケレハ天神
ノ切通モ道漸開下谷ハ衣類モ夕セ病人ニ逢セ
ハ着ノマノ所ハ着サセ悦事限ナレ追付小屋ヲモ
掛病入ノ心ヲモ休ノケリ其節ワラ干一足百錢ニモ
稀也油一升廿日干菜一連百錢是モ小松川ト云

處へ買ニキモトメシ之食アリトイハレ蓋物ナケレハ
御施行ノ粥モ尾ノカケ切アミ笠ニ受テ食セシ之
然故ニ彼處へ出レ置ケルハ未味曾等モ少フス
リハアレ其節ノ一ナレハ上々ノ味ニ覺皆用ヒケリ
此病入慈悲深ク孝モ又各類ニシテ学モ勉夕止者
也然レ不幸短命ニシテ其歳九月十二日四十余
ニシテ死去セリ華光院蓮久トハ是也予数年前合
カヲ得テ教レ難思ヒレ所ニ峽節所ニ教レテ
安居院ノ五字七字ウヘナレシヲホトヲレ、上下畧
今ノ御代鳥獸追モエタカニ殊ニ犬ノ食之カラス

單梅
暈
三

尊祐
此二条
ラレハ
此處
作者
二應
所ノ人
ラレズ

ヲ見テ有員者兩人寄合テ治ケルハ一人云カホト明ル
暮ルマテカセリトイヘトモ食ハ犬ニ劣リタリト云今
又ノ云ケルハ我々白ハ人タリトイヘ心ハ犬ニ劣ル故
ナルヘシトイヘリ亦座頭ノ六尺共云ケルハ世ニ身ヲ過
ル者多中ニ欲カ身過ホトロ惜業モナシ人カ人ヲ
カクサ人アルニ目モ無者ヲ昇麦ハ無念ナラヌヤト
云ケレハ今一人カ云ケルハイヤ夫ハ後ナリ犬ヲ昇ラサ
世ヲ喰ル者アリトイヘリ下裁トイヘ凡才簡ハ面尊
ニ書記也是モ自然ト五字七字ニ叶ヘリ
松下源在馬ト申者宰人ノ時勢明ノ知ト云所引

込柴ノ刈杭ヲホリテ渡世トセリ其比京極安智ニ
彼カ古傍奉在付殊ニ出頭ヤリアル時此者一云
智仰ラルハ能宰人ヤアルト尋玉ハ此者被源在馬
ヲ幸ト存出申上ケレハ先知ヲ尋玉ニ四百石ト答
三百石ニテ召出カルヘキト之彼者申上ル糠浪人ノ
砌ハ立身ヲ金申ゆハ今程勢明ノ山中ニ門込已
ニ亂ニ及ト源在馬定テ辱存第ヘキト申上ルサア
ハ其方ヨリ早ニ使ヲ越ルト足輕兩人ニ秋ヲモクセ
モ子ル處ニ宰人ニ在所尋ケレハカヤウノ御使ト
請申ヘキ者ヤウニ存セスカレハ以所ヲ源在馬

是トト教ケリ其小屋ヲ見ニ包食ノ居所ニモヲ
トリテアサコシク雅内ニアルタイニモ鬼ヘス去ナカラ
卒亦ニ戸ヲ明ルモイカリナレハ外ヨリ常内ヲ乞ケハ
女ノ声ニテ各何方ノ御使ト問ル々ト云入ケレハ
常々女房モ聞ヲレタル方ナレハヒツカニ垣ニサレ置レ
ワキサレテ草物ニ包外ヘ出使ニ對シ呼テ可系御
待アレトテ彼カリ靴ホリレ所ヘ行カヤウノト云
脇指草物ヲ出シナレハ女ヲ親奉ノ処一持テヨケ
ト云サテ使ニ待テト申セトテホリタル刈靴ヲ
シタカニ背負鉄ヲモ其上ニ載テ小屋ニ歸

荷物ヲ使之見ル処ニテ赤ヲロレナニカモノ使カ
ト問ケリ西使モアヤシニサレテ毎礼ニモアラス謹テ伏箱
ヲ持ケリ小屋ノ前ニ石ノアリシニ腰赤カケ彼状ヨヒラ
キ見テ云ケルハ先以西使大義ニソソキタラレタリ見分
々トク小屋ヘ入ヘキマウモナレ早々返リ玉ヘ返答モ能
墨ナケレハ夕、口上ニ申サレヨ久ク使モ無処ニ息災璽
我等モ余イマニナカラヘテソソサテ状ヲ見申ニ未ホ
ル、年ニモ無所ニ不思及ト申タルト申サルヘ下
之甚時西使申ケル近所ヘ系硯筆カリテ兵を
ハシ一筆御返書アツハレ玉ヘト申ケレハ源左衛門

大ニ怒リ見レハ随分ト器量モ往者氏ノ此口
分リノ口上ヲシカモ兩人シテ覓ヘキヤト怒ケレハ兩
人コソリテ乞見ノヤウナル者ニ悪クセラレテ腹立ノ
心モ出来甚修帰リカウウト申ケレハ彼者思ノ
外ニ存三百石ニテハ安々ト參ヘキヤウニ申タル夏
ヲ悔居ケル処ニハヤ安智ヨリ彼ノ返書ヤ有ト御尋
有ケレハ登城是非ナクアリノマニ申上ルサスカ安智御
人スキニテ乞之ウアラハ本知ノ上ニ立身ニ足輕世人
御預有ヘキ由可申遣ト也追甘亦状ヲモケレ其時
漸ヲタマカニ近日參相談可申ト返答ニケリ

目見ノ時紙衣ノ上ニ上下ヲ借リテ着出ヘキト申処
工小袖上下被モシト人此者高者ノ夏モアリ書跡
杯モ並ニ勝タリト所込セリ古ハ能侍トイハハヤ
ウニ規模アル処ニ今様ハ先知アルヲ無足ニ押下侍
ノ志ヲクジキ候ヲ付リ是ヲホリ出トスル世ノ中時ノ風
義ナレハ是祓ナシ然ニサル御家ノ至召仰ニ能侍ホ
宝ハナシ先知ヲ下ケ候ヲ付ル取ハ入ノホリ出ト云夏
ハ無クト仰ラレト也御頼母ニキ御一言ト所込セリカ
ヤウノ御家ハ何事ヲ出来ノ時ハ雲ノ集ルヤウ
ニアルヘキモノトツ

加藤九馬先般ノ道具持跡在衝ト申者已カ預リ
名銀ノ銀ノカナ物ヲハツシキケリ其段額已ニ
折罪有ヘキト折節夕ノサセラルヘキ道具是有之
直ニ御覧アルヘキトテ御出役者ニ對シ直ニ仰ラ
ルハ已ハ竊ム物ツツアレ 鎗ハ武士ノ第一トスル物也其
上已カ預リタル通名ヲ盗ム重罪ノ但妻子
アリヤト御尋 所持ト申又敷又御尋 母ト妻ト子
二人甥一人ト申上ル祿ヲ御尋 三西二人扶持ト申ツク
御聞届被仰ハ二人ノ扶持ニテ六人ヲ過ス事
盗ニ非スハ叶カタルヘコトヲ免 玉ヒ割 男子ハ草

履取ニ召出サレ娘ハ奥方へ奉公甥ハ足輕ニナル還而
仕合能傍書モウラヤマシカリシ之今ノ世ニモカヨウノ
類何ノ家ニモ多也小身ニシテ扶助ノ者多時ハ
下々ハ竊ニ取スハ叶ノタカルヘシ何ニテモ小身ナル者子
共其外ヲ御ナキカリ人又者ニハ簡ヲ加フヘキ
更ニ貪ノ盗ニ志ノ哥 所帯侍 法腹念仏ト世
話ノ言葉也カヤウニホネヨリ大名ニナラセラシメ
御方ハ發明ノ更ニ多カリト也

加藤肥後守殿ノ御家ニ傍輩ノカゲ言ヲ申スル
トテ討景ケルハ肥前公ノ御ニ自今以後カケ言可慎

但是求慰レ忍ハテ予カ噂ヲ申セ是許也傍輩ヲ
沙汰スルトキハケシクハス至人ニ損ヲカケ不忠之
予ハ夏ヲ三時ハ能ク甘悪ニ付身ノ誠トハ成レト
是モ一義アリラレル賢居ノ沙汰モ多クトイ
其頃秀玉ヲ御大者ハ人ト云カタレト之

草梅蒲

生氏御也

羽柴飛

浮島氏御

全津御

八天正六

年庚午

有上旨

今度氏郷へ

秀吉公ノ御時代蒲生忠三良氏郷カト申ハ勢
州ノ城主タリシ時ハ三十六郷ヲ領シ玉ヒ五万
石ニテ其ノ千奥州會津へ百万石ニ被奉被キ
ケリ其頃吾道三法印秀吉公へ申上ラレハ
今度氏郷へ莫大ノ御加増奉代未聞ルサソ

氏郷有カタク存ラレヘシト申上ラレテハ其時秀吉
公ノ御ニ世上ニテモ其カタアリヤ氏郷へ参悦ノ
程見届有ヤウニ可申上ノ上意之仍道三早々
氏郷へ参悦意ヲ述ラレ、処ニ其通トハカリニテ
世上ニ取沙汰スル程悦ノ色見ヘスサテ登城有
マニ申上ラレ、私加ク存程悦ノ色見ヘ申サスト申
上ラレ、其時大閣ノ上意ニ左様ニテコソカト仰ラ
レ、世上意モ道三ハ不審ニ思ヒシト也叔秀
吉公御薨逝ノ後氏郷へ道三参會其節ノ、
咄ラレテ悦ノ見ヘ井ルトマタ秀吉公ノ上意モ今以

心得ナレト申サレケレハ氏郷其時サケケシ勢州ノ地
 ハ天下ノ至有地ノ大閤早ク是ヲ御寮奥州へを
 カレシ之甚砌セヒナクサトラレケルト寢食快ヨカラス
 然ハ概ノ色ハ見ヘコキト詔玉ヘリトソ或人曰万石ヲ
 石足スル者ハ千二千ヲ領ス千石ヲ悦トスル者ハ百ニ
 百ヲ得ル百石ヲ悦トスル者ハ一生毎足人タルヘシ
 此ト裕ラレケリ世詔ニ富士山ホト願ヘハ桃ノ実ホ
 下得ルトハ申ナラハセリ乍亥夜ノ令限ヲ知ラ
 テる令ヲ願ヒ主人ノ禄ヲ有カタク思ハサレ還
 テ天罰アクルヘシタ、至アラハ取ハキ程ノ趣ヲ

實梅今
 桃實ヲ
 實ルモノ
 言田之山ノ
 形ノ板ニ
 ヨセテテ
 盛ルハコ
 ぬれ

有マ勉也

蒲生下野守殿御内蒲生源九衛門ト申家臣へ上野守
 殿被仰ハ仙臺ノ正宗參勤ノ節ハ此陣下ニ本陣ヲ
 泊置不快ト仰ケレハ夫コソ安キハカリコトノ由ヘキ
 私又覺ヲ以重テ泊置之様ニ可仕トテ相待處ニ
 又城下ニ本陣ヲムカレケリ追付御着ノコ澤為
 其マ、本陣へ參着座ノ間へ上リケレハ亭主出テ
 正宗只今御着ノ由申ケレハ御着ノ節ハ明テ渡
 アヘシ甚内少休息セントテ床ヲ枕トシテソラヒ
 キカヒテ休ケリ本陣ニ甘居ケル番人モ亭主ト

相談トマアツスル内ニ御着ニテ座あるへ上玉へ其
時漸く起上り御目通ニ畏ケレハ正宗公被仰ハ其
モトニヒカヘラレシハ誰ヨ我ハ仙臺ノ正宗之と仰ラ
ル其政源左衛門ト申挿私多浦生下野守カ家来
浦生源左衛門ト申者ニテ所度ハ今日鷹野ニマカリ出
夏ノ外草外御来陣とも石辨休足仕無礼仕ト
申ケハ正宗公被仰ハ内と聞及ル様ヲソカラフ知入
ニ成珍重ト仰ラレ初ノ参會祝儀マイラスヘキトテ
御腰の服指ヲ給トテ是ハサセル道具ナラ子トモ
其方ノ様ナル大男ヲ大ケサニ切ぬハ股ノ下コテ切

サケタリト仰ケリ其時頂戴シサテ御腰ノ明申
内々忍秘者大服指ヲ被召置ルヤウニト指上申サ
テ大服指ハ私領内ニ行目ナル大男天定トテ尻
のワレメコテ真ニツニキタル業物ニラ成座ルト申
上退出シケリ其跡テラ正宗公仰ラレハ氏郷
以来緒待所結トテ字ハ源左衛門随分徒在者ト
ト被仰ト之又々々々重テ城下ニ御泊無トソ
彼所家職ニ二代目ノ諱ヲ馬ノ酒井諱明公ハ家又
分ト号シ万石ノ内ニ御合カアリ是モ親ニヲトラ
又者ノ所ハアリトシ其マニ事おルヤウノ侍ニテ

三騎所持家来ヲ也ニ其身花奢風流モナリ
冬中袖四夏モ其通批物思毎邪ノ墨紙一幅
ヲ所持テ然レ一計三策ニテ一ヶ月三度々傍輩
リ招明セケルトノ月六サレニ風呂ヲ燒家中ハ
鏡ニ当テ其外今風ニ替タル事一ヲカリシ之
生駒讃州公内真錫跡少ト申者カリレ毎覺ノ者
感狀教十通有之トイ一氏強勇ハカリニテ智不足ノ
人ニテ禄三百石ニテ終ケ少若キ時親ノ敵ヲナハ
軍ニテ討テ双ノ働戰場ノ功名ヒルイナキ之或時
聚落ノ城下ニテ酒井雅樂頭殿ノ所ハ公使ノ使ノ

系廣間(啓)居ケル処ニ福島大輔殿モ汝是モ御
控の内侍少ヲ見損エ玉ヒ其方ハ舞マヒカト決
尋アリケレハ侍少イヤトハカリニテ云與ケニ答ケ
身成程賤ケニ見ニ故トツ叔雅樂殿ハ一以逢大
輔殿ニテ仰ハ只今廣間ニ舞マヒニ似タル男アリ
何者ト仰尋マレハ雅樂頭殿被仰ハアレハ生駒
讃州家来カリナキ覺ノ者ト仰之サレ大輔殿
御酒ヲ乞跡少ヲ召先程ハ年尔ノ格扱ヲ申タリ
ト仰依酌アリテ盃ヲ被下ケリ侍少頂裁其衣服指
ヲ着ニ被キ其盃ヲ返シハニトハ乞大輔殿御盃

御啓先別を、舞ヲ所望ト仰ラレ毎調法云
御免ト申然レ氏達テ御所をヲリ其時活物様
御前ニハサシアツハシハ、私モ可^上ト申太輔^多被^仰
ハ服差ヲ音ニ出メリ其返報ニ舞ヲト被^仰示
助申ケルハ私ノ舞ハ御腰ノ物何百ニモ^上イカキ
舞ニテハト申其取雅樂^預及何カト座^具
仰ラレ取終カシ盃ヲ雅樂^預及^由仰^ルハ太輔^及
御時也^殊分^符領ノ脇指ヲ返上可仕ト申^ハ
雅樂^預及^作ニ先程ノ口上ニハ似合ハス^美太輔^如キ大
名ノ物ハ何程モ受申^ニツ然^ルハケレト^母理^ト

キハサレシ也又其後大坂ノ石垣諸大名^元請^取集
セラル、時太輔^及ト^末助^及ト^並ノ^場所^渡ル^石小
讃州公ノ角石ヲ揚^ツツ^十七^取落^シ太輔^及ノ^方ハ^落
シ^刺ハ^三人^迄打^殺ケ^レハ^太輔^及事^ノ外^立腹
讃州カ奉行^氏メ^ニ末^レト^は呼^ル也^其短^氣ニ^モテ
氣^違ノ^ヤウ^{ナル}御^人ナ^レハ^誰カ^有ト^モ不^云切^ラシ
モト^進テ^出ル^者ナ^{カリ}シ^所ニ^被活^助甚^急キ^キト
テ^去ケ^レハ^太輔^及被^仰ハ^主ノ^トモ^ノカ^馬席^ナレ
ハ^家来^モ父^ハケ^ノ寄^合也^ト怒^ルハ^其時^活外
コラ^ヘス^太輔^及ハ^飛カ^リ右^ノカ^イナ^ラツ^カミ^中ニ

義上昭義ヲ扱テ云ケルハモカリヤウコワアレ主
トモトハ何モツト現付所モ動玉ソ指トホ
ヘキ氣色ニ見ヘケリナスカノ大輔及モ毎言ニテ
幸向玉ハススクミテコソヲハシケレ然處へ活助傷
輩中村小左衛門ト申者錫ウルクナル及タル
カヲ扱活助能ニタリ突トヲセ首ハ我ヲカモ也
ト後ニ控ケレハ大輔及家集多トイヘモヨラニト
スレハ大輔及ノ御舎 危シイカニセニトアキレ
ケル所ニ戸田民部ト申千石余ノ身上ノ者大
小ヲ扱捨申ケルハソコウハシ、玉フナ譚州公ノ御

身ノ大事タルヘシ我等ヲケシ人ニ捕テ退俵マウニ
ト云ケレハ其時其者ヲ捕サセ大輔及ヲウキ放ケ
リケニヤ大輔及ヲ殺メラシニハ主人ノ大事ト思ヒ
計テ味方大勢ノ中へ別入シト也其後譚州公
ノ御家滅テ後大輔及へ抱アルヘキト被仰ト
イヘ臣承別セス一生浪人ニテ果タリサテ其後
平治ヲセシ者ニ逢沿ケルハ其節ノ後詰ホトタ
クモシリ悦ハシキ復不覺ト帝ニカタリシト
也サレハカ、ル不覺モ皆慎ナク小人ヲ侮リ取
ヒニニヨリカ、ル危キ目ニ逢玉ヘリ云々畧

寛文ノ頃高野定光院ハ事清ニテ今程山ニ
能出家ヤイマスト同ケレハ世僧ノ答ニ此地ノ御苑
中程ノ出家一人モ世ニ答ト答セ也子細ハ聞ケレハ
カシハ高野修フ山中ノ坊主ヲサヘ治カ子ニ累
年所蓄地ヘ下リ俗元ハ苦勞ヲカケ理非ヲサ
ヘ解ヘカレ恩年ノ集リハ察アレトニ疎一天四
海治ル故ニ今度恩仰モ高野ヨリマカリ下ル
路次スカラ昼夜トナリ裸出同意ノ坊主ヲ誰
アナトル者ナリ往行ハル事有難キ事ト
信ラレケリ是ハ学寮ト行人方ト公事出来ノ

待ニ故ニ國王將軍ノ御恩ハ日月ニ等カ故ニ
四恩ニ入也

又高野法性院ハ去貴人ノ御尋ニ真言ニ呼子
鳥ノ啼取ニ生魂ノ法ヲ行ト云事ヲ聞呼子鳥ノ
冥祝康タキトアレハ喜段石治ト答ラレケリ
其時碩学ノ弟子中ケレハカヤウノ夏御浴十
ケレハセヒナレ由ノ上ハ十ト由答ノ十キコソ石審
ニソト申マハイヤトヨ知ラスニハアラス是ハ哥
道ニ秘スル処ニ我家ニ用ナケレハトテ猥ニヒロガ
ハ道ノ本意ニ非ス然レ故ニ不答ト之萬志ハカ

ヨウニ有ツキモノ之今時ヨノ川子ノアリサマヲ見
テハ知ララル事モ知タルヤウニカサル世中之是ハ
其頃ノ定光院借ラレニナリ是ハ兼好モハ
メテ看レセ

悉城王忠秋公或時右筆ニ物カセ玉ハ三ツ名
マテ書損レ赤面シ又看損レケレハ其暇豊明
宣丁先筆ヲ指置ケト彼者恩ヤフ定ニ腹
立ノ作ヤアラント窺レル處ニ仰ラルハ其方
物ノ心得アレキ故ニ赤面ニ及本心ヲ矢ト見ヘ
タリテ予ヲ待テ仕度ハ一途ノ大事ヲ頼ヘキ爲ク

余ハ皆頼テ仕ト云者也此心得ナキ故ニ赤面スル
之心靜ニ箴クシモ調ヨト作ラレケリ其者如涙
ヲ揮ヘカ子タリト詭リキむナル作ニコソ此者ハ
今に限ラス家中一統ニ問者皆感ホリケリ
誠ニ大將ノ一言程大切ナル也ナニ其比落書ヤリ
所老中ノ事ヲ笑ヒニ洒汰シ云ケルニ物イダ者
ヲレノ豊後ト云トイヘ凡物能云又ニハ徳マサレリ
ト云リ吾語ニ徳文ニ勝則君子之方徳ニ勝則
小人ノ云

又其頃御初君ハ此學問始ニ清書物ヲ上ラレ

古ハ善氏公ノ末孫滿公ヘ右馬頭頼行仕奉リ
其行初テ云タル物ノカナ書ノ物ニテアリコキ
御大将ノ心付玉フヘキ昏ニテ左家臣ハ必
學ヘキハ書ク云々畧

心付忌嫌ヘキモノハ品シ有トイヘ氏取分毛食
ヒコヒタル依ハ糞土ヨリスリヒ上或ハ膿血汚毒
癩病ノ者ノケカミタル依ヲヒコヒトリスキ近分
帛夕、ミノ緑ノ下白壁ノスサモテアソヒ人形
マ弓五月ノカフト漆紙唐帛繪帛表帛
扇ノ地紙ハリコ帛等其外每量之中ニモ

怨多ハ佛儒神道ノ昏冥スル事アカフコキ末世
ナラヌヤ 曆シ佛者儒者イマストイヘ氏累年
是ニ氣ノ中人云ト見ヘタリ又邪ノスサヲ賣
者モ每量ノ穢タリ物ヲヒコヒトリホリニ流ル、
ケカレコモ不淨ノ染タルヲモ其マ、切入テ是ヲウル
ト云ヘタリ欠レフナレタルハ改カタシトイヘ氏所ハ
用捨有タキ度之或智人ノ云アル穢ラハシキ世ニ
成故神社佛閣モ民家ノ如ク燒矣スルトイヘ
又タケナカレ糟テラト云菓子モ鶏ノ玉子ヲ
ル、ト云ク是モ冥ナラハ他家ハ吟味有ヘキ也

惟任日向寺殿ト申ハ九丈ノ時約倉義景殿ニハ
明知十兵衛光秀ト号百石ヲ給ルアル軍ノ大將
ニ當番泊テハ明日且ノ出仕直ニ勅ヘキトテ傍輩
サカヤキヲソリ鏡ヲ、キケルニ光秀是ヲトリ面
ヲ見ルニビニノ髪ニ白毛ハケルヲミテケレカラ
又思入ニテ鏡ヲワレシヲキ傍輩ヘ申サレケルハ旨
當番殿ニヨリ所ナキ勉ヲカキタリニハ宿
川用事申付ツキト云ケレハ傍輩領事シケリ
初宿、川内依ヘ向唯今帰ル事別々ニ非ス
例年雜煮ヲフルマウ方多明年ヨリ例ヲ入

今年餓ニテモスヘシトテヲレキ氏ヲトリヨセ有
程ノ餓ヲソクハリケル内方モ奥ヲサマニ居ケル処
ニ十兵衛内方ニ向我思立子細有テ明日且立退ヘ
ニ用意セヨト云其頃玄用事一ノ時ナレハ下人
四人馬ヲモ所持スサテ下人正ニ云ケルハ我急
用アリテ明日他國スルニ度セヨト云付ル下
人申頃日ヲヲリ切テ盡之ト申スサアラバコサ
ヲ切テヘリヲトレトテ即^時出素ス夜スカラ支
度レ内儀ヲ乘武ニノセ其所騎馬ニテ鎗ヲ
モツセ出ケリ史ヨリ越前上義濃ノ堺柳ヶ瀬ト

云所ニ着下人厄ニイトマヨクレ此所ニ古ヘ侍タル者
月込百姓ニナリ各、主ヲコテ居ケルヲ是ニ縁有
ニシテ常々マリ其外古キ侍ノ未多キ故ニ
連哥ナトシラクラシケルカアル時平前へ人数
呼集ル下テ其モテナシテ内々へ申付ケレ
自分ノ食モキレケレハイカハセニト思ケレ事
急ニ下リタレハ内方ノ髪ヲ切テ銀カ目ニウリ
其日ノ支度ヲ思ノマ、ニセラレタリト之是トハ
コラスナ兵衛内方ノ髪ノナキヲ見付イカ
リテ云カ、ルテイニ成故見捨キトノ支度

ナラントシタカニ悪ロシケレハ下女初テカヤウノト
申分ル其時十共侍感懐ノ深クニカ、ル心入トハ
ユメニモ不知過言セシ也免玉へ此ホウヒニ我天下ヲ
取タリトモ又女持ヘアラスト祈言言セラシト之率又
ノ祈ヨリ天下ノ望有トシニタリ叔尾剛清須ニ
信長公御在城ナトハ是ハ所上カセキニ行ント路銀
ノ為ニ古キ道具積タルヤツクニ足ノヲレタルゴトリ
ナト取出し古カ子カヒニウリケレハ以者大判キ取
出シ以金能金ニテアリヤト十共衛ニミセケレ半
兵衛以ノ外ニイカリテカ、ル似セモノヲ持テマハリ

ハリ付ニカハリ度トノ言ヌカトヲトシケレハ政者所ヲ
ケシキリノト子テマケテ溝ノ中へ捨ケリ扱其ア
トニ大判ヲトリ出シマカリヲナラニ草ヲ以シカ
キケレハ上ノ大判ニ成シトカテ其後カノ名
ニ至ヘヤウカリテコニ永居ニ飢ニ及テ丑キ十
三浦須ツリ信長公ハ勇上ガセリニト思ヒト云
ケレハカレナカリナカラ路銀ヤアリト向所ニ我常ニ
タナニ置タル大判アリ是ニテ妻ヲ預リ置テ下
頼ケレハサリトハ心裁ノ侍ニ其令ニテハ八木一百俵
ハモトムルニ半合ハ先へ持出ニ預リ我ヲ預リ丹

室ハ長屋へ別取分抱セト物諾スサテ清須へ
行追付在付信長公ハ御供ニカロツレ玉フニ三階下
コナカニキ者ニ御ラニヤリ其比城ノ石垣善清家中
ニハ見分ニ御付ラニケレハモトヨリ能書ニテ普請
ハ次子忠細ニ書付上ケレハ先書跡ヲ御ホムニ
又ヨリ及ルノメ覺ノ事氏有シ其年ノ暮ニ
百石給ル其後軍切度ニ此比類感状教通給ル
依之限々所取立丹別一國并江州ニテ滋賀為
島ニ万石ヲ領ニ細川三條亮ヲ信長公ノ仰ニテ
聲ニトリ勢ヲセカレニ成公ハニテ企終ニ天下ノ望ヲ

達し將軍号ヲ得テ京都ノ地子ヲ免今ニ其
名ヲ残セリ石主君ヲ執エラシニ依テ忽天討
運ニ家城ルリイハ生得天下ノ望アル人ナレ又モ
類ノアルハキレ覺ヘス時己ニ礼世ナレ其頃ノ武將
政道仁儀ノ行ヲタシ玉ハ祐ク上下虎狼ノ心ト大
リ親ヲモ主ヲモ忘レス况親屬ノヨシミハヲモヒモヨク
又世ナレ治ル世ノ不義盜賊ノ為ニナス逆徒トハ
各別ニ救ニ時ヲ論スレハ少免所モアルハキヤ叔快
人生得天下ノ望アルハ時節見合ケル処ニ信長公
ヲ限ル一モ出来俄ニ思立丹羽龜山ノ城ノ矣

倉ノ三重目一家長三人ヲ呼カヲヲキ三人カ前ニ
ヲキ申出サレハ我思立子細ヨリ但兼引毎ニ於
テハ予カ首ヲ決カニテ切テ捨ヨト云ケレハ三人此ニ
申イカヤウノ子細ニテモ其儀ニ及事有分ラス
ト申其時別儀ニ乖トテムホテ子細ヲ談シケリ
三人ノ内一人カ申ハ尤凡中意ハ無駄也得九今少時
節早故ニ交合ル事薄ケレハ以後ノ治リヲホウ
ナレト申一人カ申モハヤ仰出サレ上ハ天然四知
ノ道理ナレハ延引セハモレテ後悔セシサカルハ三時
一發駕リルヘミトテ此者ハ城ヲ不出ト之若モレテ

後ノ疑ヲ恐レテトワサテ兩人ノ家先城ヲ出諸
侍ハ觸ケルハ警明ハ秀吉公ノ加勢ニ被キ明日
發駕入ト申 渡ス入救ツリ出粟田口ヨリ三条
ノ方ヘヲセ信長公ハ匹イトマコヒト申聞 サテ三条
河原テ 馬ノ背ヲトシト下知シケル人々不審シケル
処ニ其時信長公ハ匹腹メサセルト申聞セ押込未意
ヲトケシトシテ御ニカ、ル大事ハカリモアルニキ一ニヤ
近代由丹正聖モカ、ル急ヲハ知クナレハ是ハヒツフ
氏ノ企ナレハ急ヲ思立ナキナルト見ヘタリナテ王
君ヲコイコラレタル又罰速ニシテ秀吉ニ討レ玉ヒシ

也アル時秀吉公ハ匹咄ニ秋終ニヲリレタル事不
覺然ニ先秀ニ始テ京會面ヲ見モ時心フハトシ
タリト仰ラレシトナリイアサマ勇敢ノ相アリテ盛
クナラス人ニヤ有ケシ此母公常ニ天道ヘ向ヒ我
子孫一ツヒ天下ノ主ニ成シタヘト祈ラレシトノ母公守
リ大機ハアリト見ヘタリ先秀ノ系圖ハ清和源氏
去波明知トアリ 初信長公ハ意恨ノ元ハ一歳家康
公御軍 切ノ所廢羨トシテ所饗應ニ七五三ヲ以馳
走ノ時 惟任ヲ以奉行セラレシ処ニ復日ナレハ高モ
リガヒテ悪リ成タルヲ以覽イカリ玉ヒテ扇ヲ以テ

光秀ノ頭ヲ打玉ヒクルト之サナキタニ天下ツ望ア
ル人ナレハ家康公ニモヲトルマシキト思処ニナル毎礼ヲ
憤リ此等ノ類カモトハ成タルトハ惟任君キ時
ヨリ頭ハケフルヒケレハ常ニアタ名キニカレ坊ニ
仰ラレタリ秀吉公ノ白面猿眼ニ赤ヒケアリテ唐
人ノ面テイアリト是ヲモ常ニサレト呼玉ヒケ
ルトツ惣テ大將ハ多言葉ノハツレモ賤カラスナ
モ実テイラフツエカレシレ礼タル世ハ勇ヲ下
スル故ニ信長公モ熊ト作りテ異相ヲカマハ玉フ
事多ト之取分自見打擲ハ不覺ノ至ニ戦後ノ

謙信公モ強將ニテ関東打ハノ時諸ノ頭高トテ
打玉フハ不覺ノ頂ト甲陽軍ニモ見ヘタリ又
省城前ノ城ニ青木左衛門督及アル時戰場ニ
入教捕ニおおフトテ馬ニ乗玉フ時口取不洞法
トテフミタル鎧ヲ以口取ノ頭ヲミタカニ踏玉ハ
口取後ニマハリ服指ヲヌキ肩サキヨリ打カケル
処ニラリフニ革ノ羽織ヲ着シ玉フ故ニ太刀深ク
不入切サキニテ肩サキヨリ帯ノキハマテ切サケ
レ下ハハイハラカキノヤウニアタリ血ニミタリサレ
レ左衛門督殿ヲキキニ玉ハアタリ処ヨク一太カニ

テ切雷玉ヲ直ニ見タルト申老人ニ越前ニ交
シ之下トテ努メアナルトナカレト語シ是モ同
一性ノ源ヲ知カル故ニト畧

世ハ末法ニ下リ又ノ大病付リ所以者何ハ受
長元和ノ預アリ烟草ト云妊草天國ヨリ直
リ人年々ニ貴賤ニ用ル事日ニ輝クニ
徳ニシテ免多トイハレ風妹ノ着ニ迷此矢ヲ顧
ル又ナシ聖人ノ世ニ此草出ナハ五辛五戒ノ戒
ヨリ堅カレヘシテ一座席ヲ穢シ火難是ヨリ
起ルイハレ更ニ不厭好マサルモノ、氣ヲ破リ刺

禮儀ヲ不知ケフリシタカニ吹カケ吞カラノ灰ヲ
吹出シ菓子食物ニ入事ヲシラスヒトニ巴カステ
ル心ニマアフルハサリトハフサマシキ愚人ト云ハレイカ
ナル好抱トテモ二六晝夜用ル事ナシ以草ニ託
テハ行時ニマナリ是ヲ用ユ人四五人モ寄合トキハキリ
フカキ山中ニ居スルカ如ク飢タル者ノ食ヲムカハ渴ミタ
ル者ノ水ヲ求ルニ不異ハナハタ見首鋪アリサマニ若キ
女兒法師ナト責テ用ヒマウノメニナシ心付ヘキ
之是ヨリ名香ハ名ノミ残りテ惡臭世間ニ満
タリ着心ヲ欺事ハ三道一致ナルニ此草ニ託ハ誰

免トハナケレモ此矢ヲ不尤禪律ノ師モ是是ヲ着
ル此ニ隱元系朝是ヲ忌ハ被寺計ハ禁スルト見
タリヤサシクモ心付ラレナリ唯物ハ見刺キナレシ
事ハ誤莫モ人是ヲトカマス此ニ痰注ノ病有
人痰壅ヲサゲテ入ノ文ヲセハ誰カ是ニ近付者ヲ
シ然ニ灰吹ト号痰ヲ吐莫一人ニ限ラス数多ノ
痰ヲ吐タメ座中ニ是ヲ置其句ヒ己ニ糞土ニ
コトナラストイ一モ好処ノ迷ニ是ヲ知ルモ或時ハ
堂社佛客ノ灵場談儀講釋ニモ平時一時ヲ堪テ
火ヲ覓痰ヲ吐又ハ前後ノ人ノ衣類ヲ燒釋テ

欲テモ餘リフリカ、人ノ業指ハ惡業ノ種ヲ將ナル
ニ是未法ノ如來病ナラヌヤ幸莫ヲ夢葉ニ
習具事ヲカハヤニ忘ルトハ是ナルニ又人ノ噴
穢ニ名笑ハイタリ是ヲ忌嫌トイ一モキセルニ於テ
イカナルニ癩病ニ瘡毒ノ者ノ痰咽ノ付タルヲモ
更ニ不厭是ヲ用テ藥トナストアサマシキ 迷入
業深止メカタキ者ハ責テ大分ノ無作法ヲタシム
ヘシ

一痰ヲ吐事
一談義講釋時不可用度
一各カラノ痰ヲ吹出時可心付事
一食事ノ時煙草出スヘカラス

吞へカラ寸事
一風上ニテメ、面ニ煙可忍
一キヤル掃除人ホ遠慮ノ夏
一上下正ニキセルクワヘコト
ワカ成ヘカラナル事
一天草飽マテ子テ入
永吞殊ニウヘラヤ度ニ
事

此外悪良教有トイ
之惣テ成イカリ續サマニ飽マテ吞風情見苦
アレ頼リハ戒子孫相讀セ、以各ヲ傳テ堅ク守ル
カ、惡草ヲ年ニクモトルハカラス悲哉以草
ヤリ初ニ時喜傾ノ時君未代ノ失ヲ考思
ル

御法度堅仰出サレ或時ハタハフ作りタル者ヲ籠舎
セレメ或時ハタハフキセル過ニカラシ燒捨高賣人禁
玉フトイハ正此草ニ一度フシ味ニ着ニタルモノハ命ヲ
捨ル一ヲ更ニ不厭ル成敷ニカナス切支丹ヨリモ止
カタク祇乏ソコク高人ノ中ニモ用玉フ方おまへル故
ニ今ハ是ヲ嫌者アレハ希希有ノ思ヲナセリ
有猿ノ笑ヲ湯カ如ク世トワナリケレ 中畧
又煙草ノ各日記ニ七種ノ異名出タリ
一ニ癩病草是ハ冥國ニ癩人多死タル國アリ
此尸ヲ理メテ饅頭ノ中ヨリ出生ノ草之故ニ毒

膿血ノ性ヲ含テヤニノ白ヒ世ニタクノ物ナレトイヘリ
又ハ説ニ此草ニタヒ觸味モノハ癩病ノ發タルカ下
ク治ニカタキヲ名トセリト之

二勞咳草是ハ勞咳ヲ煩者ノ死タル塚ノ中ヲ
出生セル草ナリト一説ニ此草用ルヤイナ痰ヲ吐
セキ上ケ咳ワウスレハ名トセリト之

三ニ放火草又似城草是ハ異國兵王后西施
カ塚ノ中ヨリ出生ス以女帝ニ放火ヲ悦國ヲ返リ
道女ヲ傾城ト云モ是ヨリ起シリ今モ道女此
草リモテ道ノ煙草放火傾城ノ名當時最可忌

恐者ニアラスヤ 四火破已 字ハタ已ト也ヲ破以名トセリ

五火馬麻 用此者ハ火馬麻者ナレハツ也

六和名 アホウ草

七菅岩

石名異説多ケレモ好者ハ右ノ名ヲイミテ今

菅岩ニ似タリトテ号之

一紀州笠寺ノ住僧六十輩ニシテ煙草ノ惡ヲ知テ止テ
下唐邊伯玉ハ五十二ニシテ四十九年ノ非ヲ知リテ
住僧ハ六十二ニシテ五十九年ノ非ヲ知トイヘリ其國ノ
大守ヲリク被寺へ西來臨トソ以守護モ煙

州アチカチニ凍玉ヘリ被西守殿ハ常ニ戸サニテ
人ヲ入ナル処ニ或人處望ニテ拜見ニケルヲリカラ
縁ノホトリニテカノ惡草ヲ吞ケル所ニ三回ヲ控テ
守護入セ玉ヒ此處ニ太破巳ノ臭氣サカマナリ
トテ忌玉ヒト彼僧ノ語レリ清淨ノ鼻ヘハ一入
惡臭ウケルヘシ 玉畧

一明曆間寧武州大次ノ節 予カ知人ト郷ニアリ
淺草ヨリカケ甘見舞ケレハ亭主病人ニテ疾
家ヲ明運ケリ亭ノ伯父カ家モ候頼次ニ逢以
処へ退来ル処ニハマ 鄰 コラ火程ケレハトクノク

出ラレヨト申セ玉イロリノハタヲ離ヤラス 何ソ尋ル
テイニ見ヘシホトニイカヤウノ大切ノ物ヲ失ヒケルト
尚ケレハイヤトヨクハマヲ一服吞タキトテキセルヲ尋ル
トワ答ケリモツマ戸口マテ火ノ付ケレハ早ニ出ラ
レヨトムリニ別立出シケリ路スカラモ是ヲホイナリ
予ア眼セメテ一服ノマセセラテト云ツフヤキタニ其後
世モ靜ニ成參會ノタヒコトニカノタハコノ意恨今ニ
アリトツカケリ此者ノ嫁ハ其日産行七夜ニ當リ
女房ハ眼病ニテ嫁モ口疳ニ下入ニチヲヒカシテ
行方不知ナリケル風ノハケニキナク云ハカリナシ

日ノ光モ見ヘス百千ノ雷ノ一度ニ落カレルヤウニ
テ四方鳴ワタリシ也カ、ルツリカラ矢草ノ望サ
ラ〜思ヘハ着心ニ此ノ源草ツヤ其マロノ旧記多
ク家ニ百一ニ故ニ詳ニ記サス

一 一軍淺草田原ノ至鋪ニテ極端ヲハムクトテ矢草
ノ火移リ四五人オコロカレ江府カリシ毎郷雷ノ
下ニ其取廣間ノ番人朝請取ノ者連系リテ
二人内一人屋鋪ヨリ直ニ他出スルトテ相番ヲ頼
代ヲ待ウケス出ケリ其以後ノ更ノ番人科ニ行
ルハ次第ハ請取連系者ハ閉門ニ他出ノ者ハ追

放請今者切取ニケリ 常ニカヤウノ頼ニタケ
ハ車ハ又事ナレト互ノ更トテ弓断スルノ吟味ノ
上ニハヤウハト知ニキ為ニ祀置之廣間番人火
ノ用心申甘ニキ由仰渡ノ故ニ近年大坂ニテモ
極端飛ケルカ、ルマハコノ故ナルニカ、ル思事日
々ナレ矢草ノアヤマテハ人トカムル者更ニ是寺
父上野分及ハタマ嫌玉ヒ常ニ仰ラレハ毎類ノ
侍ヨト又氏矢草ヲ會ヲ見テハ毎類ノ夕ハケオ
見ナレト仰ラレト也又所祖父ハ夕ハ初ハスト
ケレ其後上ニ所嫌トテ宥ニテハカリ用玉フ処ニ

・ 或時念煩元來此居ラレニニ夕ハコヲ用玉ヲ見
以人ノ云貴公ニ於テハ所用ヒ有マシキ更トアカレテ
シハ其形赤面ニ玉ヒ其夕ハコヲ吞サレ烟ヲ吹出シ
捨又ヨリ堅ク断止リアリケリ其一肢ハ吸ハクニ
玉フヘキ更ナルニ誤ヲ改ハ即座ニヤウナルヲ午
卯ニナシメキモノト沙汰ヤリ誤ヲ人トカムレハ習
ヨリアラタメシ本用ヨリトテヲクル人ハ一生アラ
タメサルモノク磨シ過ヲ論スル人モ此草ノ迷々
於ハ法ヲ破ルカワレ忍テ用ヒ玉ヲ呪ヤ凡下ノ
モノヲヤ一切物ヲ隱ス一念ノ起ル処ハ同更ニ

ハウカレキ一念中ヨリ是獨悟ノ又ニ非ニハ是ヲ感得
スハカラス凡飲食モ又中ニ火煙ヲ以慰中スル更
未法惡世ノ印之入ノ短氣短カナルハ皆火ノ情也
此一凶ヲ止スニハ徃々殊大雜穢ナラニ

己上二十四條ハ或人ノ隨筆三卷中ヨリ抄
出ス以隨筆未詳作者名字文中ヲ按
スルニ元禄ノ頃ノ人ニテ明曆ノ火事ヲモ見
こ人ト見え

世説雜話上題 見云ノ中抄ありの条
ハ 此日信玄禪家の 手帳の ありの地 一極樂

